

目次

序章	1
第1章 言語変種	11
◇章の概要	12
1-1 属性とことば	13
1-2 場面とことば	27
第2章 言語行動	41
◇章の概要	42
2-1 ことばのストラテジー	43
2-2 ことばの切換え	57
第3章 言語生活	71
◇章の概要	72
3-1 生活とことば	73
3-2 民俗社会とことば	87
第4章 言語接触	101
◇章の概要	102
4-1 方言接触	103
4-2 他言語との接触	117
第5章 言語変化	131
◇章の概要	132
5-1 音の変化	133
5-2 文法・語彙の変化	147

目 次

第6章 言語意識	161
◇章の概要	162
6-1 ことばのイメージ	163
6-2 ことばとアイデンティティ	177
第7章 言語習得	191
◇章の概要	192
7-1 幼児語	193
7-2 中間言語	207
第8章 言語計画	221
◇章の概要	222
8-1 国語政策	223
8-2 日本語政策	237
索 引	251
あとがき	259

序 章

本書は、社会言語学（sociolinguistics）の教科書である。

みなさんがこの本を手にした動機には、社会言語学という学問をある程度勉強して興味をもったからという積極的な動機や、社会言語学という見慣れないタイトルにひかれるところがあったといった漠然とした興味、卒業論文のテーマを探しているといった実用的なものなど、いろいろな種類のものがあるだろう。しかし、「社会」という極めて身近なことばの意味がわかったようでわからないものであると同様に、「社会言語学」という学問の中身も、何となくわかるようでありながら、明確な輪郭をもっては浮かんでこないままに手にされた方も多いのではないだろうか。

社会言語学という研究分野が成立したのは、それほど古いことではない。編者の経験を振り返ってみよう。1971年初夏のある日のこと、当時、編者は東北大学の大学院学生であった。まだ大学紛争の名残をとどめていたキャンパスを歩いていて、偶然にある方言学会の案内を目にしたのである。そのときの衝撃は今も忘れられない。その発表題目の副題に「ことばと社会の関連を求めて」とあったからである。当時までは言語学研究の用語に「地理」はあっても「社会」という用語が存在しない時代であった。「社会」との関連などを探るのは言語研究においてはタブーであると叩き込まれていた〈昔〉のことである。いずれにしても、この題目を見て、新しい時代の到来を予感したものであった。

そもそも社会言語学とはどういう学問なのか。ことばのどのようなところに興味をもち、どのような方法でその問題にアプローチするのか。これまでどのような問題に取り組み、どのような成果を上げてきたのか。現在どのような課題を残しているのか。本書は「社会言語学の展望」と題して、こういった問題のありかと方法、これまでの研究の流れを追うことを目的として編集した。ここではその最初の一步として、社会言語学という分野がなぜ誕生しなければならなかったのか、それは他の言語学の考え方とどのような点で異なっているのかをまず整理してみよう（§1）。次に、これまでの社会言語学が取り組んできた研究テーマを分類して本書の構成を示し、以下の章の導入としたい（§2）。

1. 社会言語学の基本的な考え方

1.1 社会言語学とは

社会言語学とは、「社会」という修飾語がついた、言語学の下位分野である。修飾語がついた言語学にはその他に、心理言語学や応用言語学、歴史言語学、対照言語学、認知言語学、コーパス言語学などがあり、最近ではさらに、接触言語学や臨床言語学などが仲間入りしている。

修飾語がない「言語学」は、広い意味では、ことばを考える学問分野すべてをカバーする用語として用いられるが、狭い意味では、言語以外の情報を分析からできるだけ排除して、音韻体系や文法、語彙、意味など、ことばそのものだけを扱う研究分野のことをいうことが多い。それに対して修飾語つきの言語学は、さまざまな要素や観点を加えてことばを分析するが、その修飾語と「言語学」の関係は一様でない。対照言語学は2つ以上のことばを対照するという方法を採用する言語学であるが、コーパス言語学はコーパスを用いる言語学である。われわれが本書で取り上げる社会言語学は、心理言語学などと同様に、ことばとそれ以外の事象（社会や心理）との関係を探る領域である。

もっとも、このような捉え方には異論がないわけではない。「ことばというのは社会のなかで初めて成立するものであるから、社会的な要因を考慮しない言語学はもともと言語学ではない。したがって、わざわざ社会言語学などという学問を設ける必要性はない。それが言語学なのだ」といった意見である。本書ではこのような考え方に共感しつつも、慣例にしたがって、「言語学（狭義）」と「社会言語学」という用語を、先に示した意味で用いることにする。

1.2 社会言語学の採用することばの見方

18世紀の末から徐々に発展してきた言語学は、「言語の体系はすべて平等である。「未開の言語」や「くずれた言語」などというものはない。あるのは体系間の違いだけである」といった、相対論的な見方を1つのテーゼとしてきた。この見方によれば、言語学の歴史は、さまざまなことばの体系を、それ自身、他とは異なった、独立した言語体系であると認めるようになった歴史である。たとえば、次の、不等号の左の言語体系は、時間的に先に言語学の正当な対象と認められたものであり、右の体系はそれに遅れて正当に評価されるようにな

第1章 言語変種

1-1 属性とことば

[キーワード]

言語変異、地域差、階層差、性差、年齢差、若者語、集団語

1-2 場面とことば

[キーワード]

場面、待遇表現、書きことば、話しことば、スタイル

章の概要

世界のどの言語であれ、それぞれの言語は、その内部に、さまざまな変種を含んでいる。たとえば、話し手の出身地の違いに応じた地域方言や、話し手の社会的な属性に対応したことばの違いである社会方言、1人の話し手が場面によって使い分けるさまざまなスタイルなどである。

ことばというものが話し手や書き手の思考や意思を伝達するためだけにあるのであれば、それぞれの言語は1つの標準語に統一されていることが望ましく、変種などないほうがいい。にもかかわらず、それが人工言語ではなく自然言語である限り、変種のない言語は世界には存在しない。

ことばの変種にはどのような種類のものがあるのか、そのような変種はなぜ存在しなければならないのか。本章ではこれらのごとについて考えてみたい。

ことばの変種は、次の2つの視点で整理すると捉えやすい。

(a) どのような人が使うのか。

(b) 個々の話し手が、どのような相手に対してどのような場面で使うのか。

(a)は話し手の属性と結びついた変種であり、「1-1 属性とことば」で整理する。なお、話し手のアイデンティティも属性の1つであるが、章を改めて「第6章 言語意識 6-2 ことばとアイデンティティ」で概観する。また年齢差の一部は言語変化の現れであり、「第5章 言語変化」の内容と関係する。それぞれ関連づけて読まれたい。

(b)は「1-2 場面とことば」で取り上げる。ここでは主に、ある社会にはどのようなことばのレパートリーがあるかを整理することに重点を置き、1人の話し手がそのレパートリーをどのように使い分けているかという点については「第2章 言語行動 2-2 ことばの切換え」で概観する。

なお本章では、それぞれの変種を、便宜的に、「1-1 属性とことば」と「1-2 場面とことば」の2つの項目に分けて展望するが、上の(a)と(b)はあくまでも研究のための視点であり、地域方言や俗語などのそれぞれの変種は、実際にはこのいずれの視点でも捉えることができる。たとえば地域方言は、普通は話し手の出身地という属性から捉えた変種であるが、1人の話し手が場面や聞き手に応じて使い分けるスタイルでもある。また俗語は、くだけた場面で用いられることばであるとともに、若年層が好んで使うことばでもある。それぞれの変種は2つの視点でどのように捉えることができるか、考えてみてほしい。

1-1 属性とことば

1. 研究対象

ことばは、同じ内容のことを言うものでも、それを使う人の出身地や階層、職業、性別、年齢などの「社会的属性」によって違ったものが使われることがある。これは、ことばが使用者の所属する集団の内部において共有されるものであること、また、人には社会的属性に応じて期待されることば遣いがあることなどを反映している。

たとえば、出身地を異にする人々は異なった方言（地域方言）を使用し、異なった階層に属する人々は、それぞれの階層に特徴的なコミュニケーション様式を形成することにより、異なったことばを使用することになる。職業によることばの違い（職業語）は、業種ごとによく使われる語彙が異なっていたり、特有の専門語（国立国語研究所 1981）を使用したりするために生じる。一方、ことばの性差は、男性と女性の社会的位置づけや役割関係が異なる社会において、それぞれにふさわしいことば遣いが求められて生じるものである。また、年齢によることばの違いは、現在進行中の言語変化が顕在化したものである場合が多いが、一方で、若者語のように一定の志向性を共有する集団を象徴して使用されるものや、「子どもらしさ」や「大人らしさ」を特徴づけることばの違いのように、社会のなかで期待されることば遣いが年齢によって異なるために生じるものもある。

話し手のどのような社会的属性がことばの違いを生み出すかは、当該社会のあり方によって決まる。欧米の社会言語学では階層差を扱う研究が多いが、これは、欧米の社会が階層差の目立つ社会であることによる。一方、日本語は性差の大きい言語であるとされるが、これは、日本社会が「男らしさ」と「女らしさ」を伝統的に区別してきた社会であることを反映したものである。こうした日本語の性差は、近年、縮まる傾向にあると言われているが、それは、男女の役割分担が固定的なものではなくなりつつあるという、現代日本社会の変容に対応したことばの変化が起こっているためである。

このように、属性とことばの関係を扱う研究は、単なる言語の記述にとどまらない。そのことばが使われる社会の構造や規範のあり方を顕在化させ、さら